

全学共通教育の令和3年度実施に向けた研修会（FD）報告

大学教育基盤センター調査研究部編

本年度は、第1部、第2部ともに講義室での対面方式と遠隔配信方式を同時に行うハイブリッド方式で一つのプログラムに全員が参加する形式をとった。第1部では、調査研究部にワーキンググループを設けて検討中の第4期中期目標期間に向けた全学共通教育改革方針に関する議論の現状と、遠隔授業に関するアンケート調査の分析結果について報告がされ、意見交換を行った。続く第2部では、「いまさら聞けない Moodle の使い方」と題して、基礎的な Moodle の使い方を習得することを目的とした演習形式の FD を行った。第1部の参加者は122名、第2部の参加者は90名だった。

日時：令和2年12月8日（火）13:00 – 16:00

場所：教育学部 321 講義室及び遠隔開催（Zoom）

対象：全教員（特に令和3年度全学共通教育担当予定の教員）

第1部

1. 開会の挨拶
2. 第4期中期目標期間に向けた全学共通教育改革について
3. 遠隔技術を活用した教育の展開方針について
4. 全学共通教育にかかる事務手続きについて

第2部

1. いまさら聞けない Moodle の使い方
2. 質疑応答・意見交換

*発表・報告題目について、事前に示されたプログラムからの変更有。

以下、当日の提題者と記録者が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育基盤センター調査研究部が編集をおこなった。第1部「1. 開会の挨拶」「4. 全学共通教育にかかる事務手続きについて」は、報告を割愛した。

第1部

1. 第4期中期目標期間に向けた全学共通教育改革について

寺尾徹（大学教育基盤センター共通教育部長）

大学教育基盤センターでは、昨年度より第4期中期目標期間に向けた全学共通教育改革についての検討を行ってきた。具体的には、「第4期中期目標期間に向けた全学共通カリキュラム検討ワーキンググループ（以下、WG）」（第1次WG）で課題の抽出を行い（2019年8月～11月）、そこで抽出された課題に基づき、「第4期中期目標期間に向けた全学共通教育改革理念検討WG」（第2次WG）では5つのサブWGに分かれて改革方針の具体化についての検討を行ってきた（2020年1月～）。3月には教育戦略室からの諮問を受け、11月に特にサブWG1～3の検討内容を中心とした第1次答申をとりまとめたところである。今後、教育戦略室からの再諮問も受け、残るサブWG4・5の検討内容も含めて第2次答申をとりまとめる予定である。第1次答申の大きな目玉としては、自己選択力を身に着けた自律的学修者を育成することを目的とした、「学びと生き方科目」の新設がある。これは、従来の入門科目の整理をベースとして、主題Aと主題Cの入門的内容を統合した「ライブデザイン」の新設、導入的学び科目「学問への扉」の充実といった内容を含むものである。他にも大きな目玉として、改革を支える科目領域支援の仕組みを構築することを目的とした「科目領域コーディネート制度」（仮称）の新設がある。これは、複数の科目領域の負担を持ち寄って科目をコーディネートしようとするものであり、これによって、従来にはない学問基礎科目（「複合領域（仮称）」）やその他新規科目の提供等が可能となる。

2. 遠隔技術を活用した教育の展開方針について

野村美加（大学教育基盤センター調査研究部長）

大学教育基盤センターでは、コロナ禍における学生の学習経験及び教員の教育経験を把握すべく、本学の学士課程の学生と本学の教員及び非常勤教員を対象として、2020年8月上旬に「遠隔授業に関するアンケート調査」を行った。このアンケート調査の結果から、今後本学が遠隔技術を活用した教育を進めていく上での課題もみえてきた（以下の3点でいえば、特に第1と第2の点）。そうした課題もふまえ、上記サブWG5において、遠隔授業を活用した教育の展開方針を検討し、現時点では以下の3点をまとめている。第1に、新しい学びのためのルール作りと学生のサポート体制（レポート作成や論文作成のマナー教育・リテラシーの向上、学生のフォローアップとコミュニケーションの重要性）、第2に、魅力ある授業を行うためのソフト面での応用展開（魅力ある授業の応用展開のための柔軟な発想、教員のサポート体制（FDや情報の共有の必要性））、第3に、魅力ある授業を行

うためのハード面での応用展開（講義室の環境整備と予算獲得、分散キャンパス問題の解決、時間割硬直化問題の解決）である。今後、第2次答申に向けてさらなる検討を行っていく。

第2部

3. いまさら聞けない Moodle の使い方

宮崎英一（大学教育基盤センター数理情報・遠隔教育部長）

2020年4月の緊急事態宣言に伴い、多くの大学と同様、本学でも対面授業が原則禁止され、遠隔授業が開始された。しかしながら、遠隔授業アプリケーションを問題なく利用できているか自信のない教員も一定数存在し、遠隔授業に関するFDの要望も高い。そこで、遠隔授業を得意としない教員を主な対象として想定し、演習形式で基礎的なMoodleの使い方を教えることを目的とするFDが企画された。

FDの前半ではMoodleの実践、後半では質疑応答が行われた。Moodleには多種多様な機能が備わっている。FDの前半では、その中でも、基礎的な内容として、資料配布、出席管理、レポート回収が取りあげられ、Moodleの2019年度コンテンツの中に、受講者自らノートパソコンを持ち込んで参加し、コースとトピックを作成した。続いて、応用として、アンケート、小テスト、フォーラム、アナウンスメントの使い方の説明があった。

FDの後半は、Moodleに関する質疑応答である。事前アンケートで寄せられた質問に対しては、藤澤修平特命助教（大学教育基盤センター）より回答が示された。また、フロア及びZoomの参加者からも続々と質問が寄せられた。例えば、アピランスの表示設定を自動にしたらどうなる？といったMoodleの使い方に関する質問、教務システムとMoodleとの連携はどうなる？といったシステム全体に関する質問、次年度の学生への周知はどうする？といった遠隔授業の進め方に関する質問、が挙げられる。これらの質問に対して、宮崎英一数理情報・遠隔教育部長から、また時にはフロアの参加者から回答が示された。

第2部の参加者は90名にのぼった。このことから、遠隔授業に関するFDのニーズの高さがうかがえる。また、質疑応答の様子からは、遠隔授業について議論する場そのものが求められていることがうかがえた。本FDを企画した大学教育基盤センターとしても、遠隔授業に関するFDを今後も継続的に展開していかなければならないことを実感させられる機会となった。